

人間社会について

1. 人間社会に関する基本的考え方

人間は社会的な動物といわれております。蟻や蜂は、社会を作る昆虫と言われており、これらの昆虫は、社会を作ることにより、集団としての生活を営んでおります。

これらの昆虫は、単独で生きるのではなく、生活集団を形成し、これが生命活動の単位になるので、超個体と呼ばれます。

このような意味で、人間も超個体を形成するものと考えられます。社会的な生物である人間社会の歴史は、超個体の社会の発展として考えることができます。

技術の進歩に伴い、人間が形成する社会は進化発展していきます。社会の進化発展の意味を、人間のための社会の観点から検討していきます。

2. 人間社会の進歩・発展について

(1)群れ社会

人間が、狩猟生活や採集生活を営んでいた古代においては、分業が発達しておらず、集団内の人間は同じ作業を行う同質な人間の集団といえる状態です。

このように、同じような人間の集まりを群れ社会と呼ぶことにします。

人間の生産性は低く、自給自足で生活を維持する時代です。

(2)超固体社会

道具の進歩に伴い、人間の生産性が徐々に高まり、農業以外の仕事が発生するようになりまし。商業や工業の発達は、仕事の分業化を進めることになりました。

分業の発展により、人間の作業の同質性が減少し、生活物資を市場で買い求めるようになりまし。人間の相互依存関係が次第に高まり、社会は超固体社会として発展することになりました。

産業革命までは、このような超固体社会であったといえます。

(3)超個人社会

産業革命により、動力機関が使われるようになり、人間の作業力は飛躍的に増大しました。技術の発展により、仕事の専門化がさらに進み、工業社会の発展は、人間の職業の分化をさらに推し進めました。

高度な工業製品は、生物的な人間の能力では生産できないレベルに達します。

大規模工業は、超個人社会の象徴となります。

(4)超人間社会

コンピューターの発明は、技術の更なる進歩を生み出しました。産業革命は、動力機関により、筋肉の力を作り出しましたが、情報革命は、頭脳の力を作り出しました。

パソコンに代表される情報機器が仕事場に導入され、これらを使わないと仕事ができない状態になってきました。

人間の能力の基本である筋肉作業と頭脳作業が機械に代替されるようになり、人間の

社会的な疎外や人間関係の希薄化が進みました。

人間の生物的な能力だけでは運営できない超人間社会といえる社会で、現在の社会がこれに相当します。

(5)知識社会

人々が通信ネットワークにつながり、社会に蓄積された技術・情報が巨大化し、人間の生物的な処理能力では、これらの膨大な情報を処理できなくなります。クラウドに代表されるネットワーク社会では、人工知能技術を使った情報機器が人間にとって不可欠のサポート機器となります。社会に蓄積された知識が、人間の処理能力を超えたとき、社会の主人公は知識になり、社会は知識社会になります。蓄積された知識の所有者が社会を支配する可能性を否定できません。

(6)超知識社会

人工知能技術の更なる進歩は、創造性や意思決定の技術を生み出す可能性があります。人間特有のものと考えられるこれらの技術が、情報技術化され、ロボットに搭載されたとき、人間とロボットの競争がはじまります。発明が、人間とロボットの共同作業になるような社会は、超知識社会といえます。技術の特異点の後に現れます。

知識ロボットの所有者が、社会を支配する可能性があります。ロボットが、ロボットのために人工知能技術を発展させる可能性もあります。

(7)知識体社会

人工知能技術とロボット技術の更なる進歩は、ロボットに心をもたせる可能性があります。このようなロボットはまさに、知識体といえる存在です。

人間を遥かに凌ぐ能力を持った知識体が社会の主人公になる時代で、人間がロボットのしもべ(僕)になる社会です。

人間は果たしてこのような社会を受け入れることができるでしょうか。

3. 人間社会の意味について

(1)人類としての種の維持

人間は、人間社会のなかで、長期にわたり人類の生命を維持してきました。

生物固有の働きである、種の維持活動は、人間社会の最大の使命であるといえます。

(2)人類の進化と遺伝情報

遺伝子の研究が進んでおり、遺伝情報の多さが進化の一つの基準になるようです。遺伝子に刻み込まれた生命情報は、生物にとって基本的な情報です。

また、進化の一つのメルクマールとして、脳の発達があります。脳の機能は、生物社会の中で学習により獲得されるものがあります。道具の使い方などは、親の行動などを見ることにより脳に記憶されます。このように後天的に獲得される生活技術は、社会を通じて受け継がれていきます。このように、後天的な遺伝情報を社会で受け継ぐ動物は、社会的動物といえます。このような社会的動物の典型が人類であるといえます。

(3)人類の遺伝情報の爆発

社会で受け継がれる後天的遺伝情報が、大脳だけでなくメディアに記録されるようになってから、このような生体外遺伝情報は爆発的に増加しました。

文字と紙の発明が、その大きな出発点となります。

その後、情報技術の進歩により、巨大な記憶装置が発明され、情報処理装置の進歩と通信ネットワークの拡大は、情報爆発の社会を作り出しました。

(4)情報爆発は人類の滅亡の始まりか

人間の生物的な能力では、処理や制御のできない情報化社会になりつつあります。

このような社会に、人類の能力を遥かに凌ぐ知識体が出現したら、人類はどのようになるのでしょうか。人類が向き合わなければならないエイリアンは知識体であり、それは宇宙から来るのではなく、まさに人間が作り出そうとしているのです。

人類について、もう一度考えてみる必要がありそうです。

4. 技術と情報の帰属について

(1)遺伝情報は私有財産か

人間が体内に有する遺伝情報は、私有財産でしょうか。人間の遺伝情報は、個人の肉体内に存在するものですが、それは個人が作り出したものではなく、種として受け継がれてきた遺伝情報を受け継いでいるものです。そして、受け継いだ遺伝情報を次世代の人間に引き継いでいく大切な役目があります。

このような意味で遺伝情報は、人類共通の財産であり、個人の私有財産ではないといえます。

(2)技術情報は私有財産か

生体外のメディアに記録・蓄積された技術情報は私有財産でしょうか。現在、我々が利用している科学技術は、長い人間の歴史を通して積み上げられたもので、社会により受け継がれてきたものです。そして、このような技術情報を引き継ぐ上で、学校教育が大きな役割を果たしております。

社会が引き継いできた技術情報という観点から見ると、私有財産権というよりも私的利用権と考えるほうが適切と考えられます。

5. 人間主義社会の実現を目指して

(1)資本主義社会

マルクス経済学では、資本の自己増殖作用により、資本主義が発展していくと考えております。人間が、単なる労働力商品となり、労働市場で売り買いされる立場になったとき、生産活動から人間性の疎外がうまれます。文化などの上部構造は、経済的な関係の下部構造に支配されるとする唯物史観は、人間性蔑視につながります。

資本効率を最優先する資本に支配される社会は、まさに金権の社会といえます。

人間の価値を金銭の多寡で計る拝金主義の世界は、人間がお金の僕(しもべ)になっている社会です。

(2)知識主義社会

情報革命により、社会の情報化が進んでおります。IT技術を基盤とする経済発展は、情報の自己増殖作用を目の当たりにしているようです。

盲目的に突き進む情報技術の発展は、人類の意志や幸福追求の願いとは無縁の世界の出来事のようにです。成人するのに20年もかかる人間にとって、技術の発展は速過ぎるといえる状態です。社会全体の情報が爆発的に増大、高度化し、人間が追いつけないレベルに達したとき、何が起きるでしょうか。

技術の特異点に達し、人間が知識体に支配される社会は、人間を否定する社会であるともいえます。

人工知能が、人間の知能を超える可能性について、真剣に考える必要があります。

(3)人間主義社会をめざして

人間は、豊かな生活を求めて、技術の発展を行ってきました。骨と関節を代替する道具と機械、筋肉を代替する動力機関、頭脳を代替する情報機器の発明を行ってきました。そして、人間の能力がすべて機械に代替されるとき、知識体が現れ、人類は破滅の道を歩むことになるのでしょうか。

地球に存在する多くの民族が、百花繚乱のような文化を築いてきました。人類の多様性は貴重なものです。日本人が、日本の文化を愛し、住みやすい社会を作ることが基本といえます。

成人するのに20年もかかる人間が、知識ゼロの状態から教育で膨大な社会の知識を1人で身につけることは不可能と言えます。人間の貴重な外部遺伝情報といえる各種の技術、情報は社会全体で、人々が分け合って持ち続ける必要があります。

人類が築き上げてきた、外部遺伝情報である知識・情報は個人資産ではなく、社会全体の資産として、社会全体で利用し合う体制が必要です。

人々は、社会のために勉強し、社会のために働く必要があります。そのためには、自己中心の考えを社会中心の考えに変える必要があります。人々が、社会の一員意識を持てば、文殊の知恵もうまれます。

人間主義の社会は、そのような文殊の知恵から作られるのではないのでしょうか。

2012年5月1日
(有)中野情報技術研究所
中野敬三 改訂